

にちぎん

2024 NO.79

秋



インタビュー 扉を開く

辻口博啓 パティシエ

人を感動させるスイーツの創造者

地域の底力

兵庫県養父市

先例にとらわれない官民それぞれの挑戦が地域を切り拓く兵庫県養父市

対談 守・破・創

津田篤太郎 医学博士・新潟医療福祉大学教授

氷見野良三 日本銀行副総裁

西洋と東洋、最先端と伝統 異なる視点で難題解決に挑む

エッセイ “おかね”を語る

山田ルイ53世 芸人 貴族とドルと円

「さあ、続いては髭男爵です！ プレイクした年の最高月収はー!?」

と盛り上げるMCに、

「コンビ合わせて、〇〇万円です!」

と声を揃える筆者と相方。すると、

「おおおー!」「すごい!」

とひな壇がどよめく。

とはいえ、そこに陣取るのは今太閤たる、売れっ子芸能人の皆様だ。

正直、コチラとしては、(アンタらの方が、いっぱい稼いでるだろ!)とそのリアクションがいささか白々しく映ってしまう。

まあ、その後、重ねて芳しくない現状を告白し、「あらら……」と鼻で笑われるまでが一連の流れなので、心の中で毒づいた件は、ご容赦いただきたい。

最近ほとんど見掛けぬが、かつて、我々一発屋芸人のテレビ番組での役割は、ネタやトークではなく、この「最高と最低の発表」一色となった。

月に二〜三度、レイザーラモンHG、ムーディ勝山、小島よしお、ジョイマンetc、似たような境遇の面々が雁首揃えて、落ちぶれ具合を披露し続けること数年間。

……何が何やらだ。

とにかく芸能界は他人様の懐事情が大好き。

かくいう筆者も、ギャラの多寡のみならず、昔家賃「八〇〇〇円」のボロアパートに住んでいたとか、その後引越したのが「月二五万円」のマンションだとか、長女(現在小六)の塾の夏期講習代が「二〇万円」でしんどいとか、あらゆる額面をネタ化し、ひ



絵・江口修平

貴族とドルと円

山田ルイ 53 世

たすら身を削ってきた。

そんな男が、とある「お金の話」で、「えー!? マジでー!!」と驚く側に回る日が訪れるとは思わない。

先日、書斎で書き物をしていると、

「また、値上がりした……」

とため息を吐きながら登場したのは妻である。

昨今の物価高は筆者も憂いているところ。

すわ、野菜がガソリンかと身構えたが、彼女が手にしていたのはシルクハットだった。

聞けば、以前は一万五〇〇〇円で買ったものが、なんと二万五〇〇〇円になったそう。

自称貴族の漫才師にとってシルクハットは、いわば、キャラの根幹、命綱。

常に五〜六コ常備するように心掛けており、毎年三コは新調している。

(……これからずっと、プラス一万円!)

呆然とする筆者の目に飛び込んできたのは、タグに書かれた「MADE IN New York」の文字である。

知らずに愛用してきたが、輸入物だったのか……と意識した瞬間、「……円安の影響?」との考えが浮かび、絶句した。

経済ニュースとして耳にはしていたものの、ドル円といった為替相場が、日本のコスプレキャラ芸人を直撃するとは想定外だ。

大体、シルクハットに家計を圧迫されるのはウチを除けば、マジシャン宅くらいだろう。

「タバコとお酒を減らします……」

と妻を宥めたが、いやはや、貴族の維持費もバカにならない。

やまだ・るい・ごじゅうさんせい●芸人。1975年生まれ。兵庫県出身。「ルネッサンス」のフレーズと「貴族のお漫才」でお馴染みのお笑いコンビ・髭男爵のツッコミ担当。6年間の引きこもり生活を綴った著書「ヒキコもり漂流記完全版」(角川文庫)ほか、「一発屋芸人列伝」(新潮文庫)、「パパが貴族」(双葉社)などがある。NIKKEI プラス1「なやみのとびら」コラム連載中。





- 2 エッセイ／“おかね”を語る
貴族とドルと円 芸人 山田ルイ53世

- 4 インタビュー／扉を開く
辻口博啓 パティシエ
人を感動させるスイーツの創造者



- 9 地域の底力——兵庫県養父市
先例にとらわれない官民それぞれの挑戦が地域を切り拓く
兵庫県養父市



- 16 対談／守・破・創
津田篤太郎 医学博士・新潟医療福祉大学教授
氷見野良三 日本銀行副総裁
西洋と東洋、最先端と伝統 異なる視点で難題解決に挑む

- 20 FOCUS → BOJ 47 日本銀行金融機構局
「地域金融サポートユニット」が始動
～地域金融機関の経営基盤強化に向けた取り組みを幅広く後押しする

日本銀行のレポートから

- 24 「経済・物価情勢の展望」(展望レポート) —2024年7月—
26 「地域経済報告」(さくらレポート) —2024年7月—



- 27 トピックス
新しい日本銀行券の発行を開始しました ほか
35 AIR MAIL from New York
ニューヨークの地盤と中央銀行

表紙のことは

日本銀行函館支店は、明治二十六年（一八九三）、函館港に臨む末広町に出張所として開設されました。現存する支店としては大阪支店に次いで二番目に古い歴史を持ちます。

当時、北海道では旧三井銀行が担っていた国庫金業務から撤退することとなり、日本銀行が道内主要都市に一斉に拠点（函館、札幌、根室）に出張所、小樽など二六カ所に派出所を設置しました。

その中でも、国際貿易や北洋漁業の拠点として北日本最大の都市であった函館の位置付けは高く、開設二年後に出張所から北海道支店に昇格し、大阪支店、西部支店に続く三番目の支店となりました。

表紙の初代店舗は、旧三井銀行支店から引き継いで利用した建物です。

明治三十九年（一九〇六）、小樽出張所の支店昇格と入れ替わる形で北海道支店から再び函館出張所に戻った後、翌年の大火で焼失しました。

現在の四代目店舗は、昭和六十三年（一九八八）に東雲町に新築移転されたものです。

昨年、開設一三〇周年を迎えた函館支店は、これからも地域の皆さまとともに歩んでいきます。

裏表紙の写真は、金融研究所アーカイブ所蔵のもので、



表紙・画 北村公司

パティシエ

辻口博啓

TSUJIGUCHI Hironobu

国内外の数々の洋菓子コンクールで優勝し、パティシエという言葉をも日本に広めた辻口博啓さん。小学生の時、友人の家で食べたショートケーキに感動した体験から、洋菓子の道を志した。しかしその後、生家の和菓子店の倒産、父親の失踪、修業先での下働きなど、苦難続きだった。そこから、いかにして人生を切り開いたのか。コンクールに勝つためにどのような戦略を練ったのか。ドラマチックな半生を率直に語っていただいた。



人を感動させるスイーツの創造者

初めて食べたショートケーキ その感動からパティシエの道へ

—— 辻口さんは石川県七尾市の和菓子屋の三代目として生まれましたが、洋菓子の世界に入りました。

辻口 実家の和菓子屋は「紅屋」という屋号で、市バスに乗ると「紅屋前」とアナウンスされるほど地元では知られた店でした。一階に店と厨房、二階に住まいがあったので、二階から音を聞いた匂いを嗅いだりするだけで、厨房でどんな仕事をやってるか分かるような環境で育ちました。父が和菓子のあんこを手で包餡^{ほうあん}するのを見よう見まねでやってみたりして、菓子を作ることが日常の中にあっただんです。

小学三年生の時、友達の誕生会でショートケーキを初めて食

べたんです。本当においしくて、僕は感動して気がついたらお皿までなめていました。友達のお母さんに「辻口君のうちにこんなにおいしいお菓子はないでしょう」と言われて、くそっと思ったけれど、こんなに人を感動させる食べ物があるんだと。この震えるような感動を人に与えられる人間になりたいというのが、パティシエへの思いの原点です。

自分が洋菓子の勉強をして、実家の和菓子屋の中にケーキ屋さんも一緒に出したいというアイデアが湧き上がって来て、小学三年生にして自分の人生プランが出来上がっていたんです。

—— 高校卒業後、上京して洋菓子店に就職されましたが、すぐ

に大事件が起きました。

辻口 田園調布の洋菓子店で働きの始めた二カ月後、紅屋が不渡りを出し、店も家も人手に渡るといふ連絡が入りました。父は家を出てしまい、行方不明。母は僕に「戻ってきて」と。洋菓子店の社長に何と言おうか悩みました。まだ一八歳だった僕は、実家が倒産したと言いつつのは恥ずかしくて……。父が車にひかれて家を手伝わなければいけなくなつたと、うそをついて七尾に戻つたんです。

母は僕のために就職先を用意していました。七尾のかまぼこ工場です。僕がそこで働いて家計を助ければ、弟と妹を含め四人で暮らしていけると。もうすぐ人手に渡る紅屋の厨房に立つて、これからの人生、洋菓子ではなくかまぼこを作って生きていくのか自問自答しました。考え抜いた末に、「やっぱり東京で

勝負させてくれ」と母に頭を下げました。そして東京行きの切符と布団を買うために、コンクリート工場で働きました。

—— 再び上京し、修業を再開しました。

辻口 次は大泉学園の洋菓子店に住み込みで働きました。他の従業員は専門学校を出ていて、高卒の僕だけ専門用語や所作を知らないの、例えばブランシールやっっておいてと言われてもどうすればよいかわからない。だから、「辻口はトイレ掃除だよ」と。結局トイレ掃除は三年間やりました。その頃は、掃除をしながら先輩の仕事を横目で見ておいて、夜な夜な練習していましたね。

—— 青春のすべてを洋菓子作りにかけていた。

辻口 一八歳で経験したことが僕の中でスイーツを入れるきっかけになったんです。家も店も取ら

れて、その現実から逃げるように父親は蒸発してしまって、友達にも恥ずかしくて会えない。でも、母親が一生懸命働いて弟妹を育ててくれている。母親の頑張りを見てみると、横道にそれることはできなかった。ほかの人たちとは境遇が違うから三倍やっでちようどいいぐらいだと思っていたし、お笑い番組とかを見て笑っている暇もなかったです。それだったら厨房に立っている試作をする。こういう仕込みをしたらどういうふうに焼けるんだろうとか、独りで探求しました。そこに一番の安心があったんです。実はそれは今も変わっておらず、一年三六五日ほとんど休んでいません。家族を不幸せにしたくないし、仕事をしていることで安心感が得られる自分がいるんです。

—— そうした姿勢のおかげで、修業先では菓子作り以外の重要な字びがありました。

辻口 僕は休みの日も店に出て、ケーキを支店に運んだり、コーヒーを石ローラーでパウダーにして翌週に使う分を準備したり

していました。そういう姿を見てくれたのか、二一歳の頃、洋菓子店の社長から「これからレジ締めを全部君に任せる」と言われたんです。それをきっかけに、僕は店のマネジメントに関わる数字を肌で理解できるようになりました。店のどこが良くて何が悪いのか、数字が物語るからです。例えば売り子が社交的な人に替わるだけで売り上げが倍増したりする。また、菓子作りの現場の生産性も数字に

緻密な戦略で勝ち続けたコンクール 本場フランスで優勝し独立へ

—— 二〇代は多くのコンクールに挑戦されました。

辻口 僕をかわいがってくれていた祖父が亡くなった瞬間に立ち会い、人生は無限じゃないと感じました。最終的に死ぬまでの間を自分でどうプロデュースしていくか、逆算しながら人生を考えていこうと。自分の給料だけではお店を持つなんて絶対無理。何もない僕がスポンサーを見つけて人生を切り開くには、

表れてきます。自分が倉庫に材料を取りに行く際に、「倉庫に行くけど誰か何か必要なものある？」と、ひと声かければ、他のスタッフがその時間を有効に使って仕事量を増やすことができます。

社長の信用を得ることによって、マネジメントというものを実践の中で学ぶことができた。これはその後自分の店を持つにあたって大いに役立ちました。

コンクールで優勝するしかないと考えたのです。スポンサーが目の前に現れた時に備えて、何をどうプレゼンするか考え、必ず寝る前に呪文のように唱えていましたね。

—— コンクールで勝てるという自信はあったのですか。

辻口 人の三倍やってきましたから、ここまでやれている人はいるのかなという気持ちはありました。ただ、それだけではコ

ンクールに勝てません。二三歳の時、史上最年少で優勝した全洋菓子技術コンクールの出場者は二〇〇〇人ぐらいいました。僕はどうすれば勝てるかを考えて、全審査員の過去五年分の講評を調べ上げ、作品のアイデアを練ったんです。

講評には、優勝した作品に対する審査員の驚きが必ず書かれています。そこを丹念に拾うと、色合いだったりクリームの絞り方の繊細さだったり立体感覚だったり、作品が時代と共に進化してきたことが分かりました。凄^{すば}い作品ができたと自分に酔って、これ見よがしに「どうだ」と出しても評価されないんです。大事なのは、「次にこの要素をこ^う出したら審査員が絶対食いつく」と計算した上で作品を作ることだと。僕はマーケティングを自然にやっていたんですね。

—— そこから国内のコンクールで勝ち続けます。

辻口 コンクールで勝ち続けたのは、優勝した過去の自分自身を創造的に破壊してきたからです。一回優勝できても、二



つじぐち・ひろのぶ ●1967年石川県七尾市の和菓子屋「紅屋」の長男として生まれる。85年石川県立中島高校（当時）卒業。同年紅屋が倒産したが、東京都内の洋菓子店で修業を始める。90年全国洋菓子技術コンクールを史上最年少の23歳で制す。その後、92年の50周年記念全国洋菓子コンクールで総合優勝するなど受賞歴多数。97年には世界最大規模のパティシエのコンクール「クープ・デュ・モンド・ドゥ・ラ・パティスリー」の飴細工部門で、最年少記録を更新する29歳で個人優勝。同年、南仏のパティスリー・ベルタンで修業。「サロン・デュ・ショコラ」（パリ開催）内で発表されるショコラ品評会では、2013～18年・23年の7回連続で最高評価を獲得し、ショコラティエとしても世界一に。また99年にはフジテレビ系「料理の鉄人」でパティシエ初の勝利を果たした。98年東京・自由が丘に「モンサンクレール」を開店。以後、「自由が丘ロール屋」、「ル ショコラ ドゥ アッシュ」、玉川高島屋の「和楽紅屋」などコンセプトの異なる10以上のブランドを全国各地で展開。石川県観光大使、三重県観光大使、あいちスイーツ大使、一般社団法人日本スイーツ協会代表理事、スーパースイーツ製菓専門学校学校長、かなざわ食マネジメント専門職大学教授なども歴任。2015年にはNHK朝の連続テレビ小説「まれ」の製菓指導を務めた。

回目は簡単には勝てないんですよ。同じような作品を出すと審査員は評価しない。過去を崩し、全く新しい世界観を表現していくことが勝ち続ける秘訣です。それでも、その頃はまだ日本ではパティシエという言葉もない時代で、日本国内でいくら優勝しても、結局、スポンサーは見つかりませんでした。

——二九歳の時のクープ・デュ・モンド優勝で辻口さんの名は世界に知れ渡ります。

辻口 二三歳で優勝したコンクールの副賞がフランス旅行で、初めてフランス菓子のレベルの高さを現地で目の当たりにしました。目で見て美しいだけじゃなくて、食べたときの鼻から抜ける香り、季節感が口の中で躍るような芸術性に感動し、本場フランスで優勝することが自分の目標に変わりました。

クープ・デュ・モンド優勝でその目標が実現し、独立を支援してくれるスポンサーも現れま

した。誰かに雇われるのではなく、自分の店でオンリーワンのブランドを作って生きていきたいの願いがありません。

——自由が丘にモンサンクレールを開店したのが三〇歳の時。三年後には店を買取り、オーナーパティシエになりました。

辻口 お店は自由が丘の駅からだいぶ離れた立地で、最初からうまくいったわけではありません。心配したオーナーが新聞折り込みを入れるようにと、チラシを勝手に作って持ってきたんです。でも、開店当初は菓子を

作れるのは自分しかおらず、僕が全部を指揮しなければならぬ。とにかくスタッフを教えて育てる時間が必要だった。だから、僕はしっかりと菓子を並べられる体制が整ってから宣伝すればよいという考えで、最初はオーナーとちよつともめました。

きちんと話したら最後は理解してもらえたんですけど、誰も知らない店ですから、案の定、半年で二〇〇万円くらい赤字が積みあがりました。

それでも口コミで評判が広が

ると少しずつ売れ始め、収支も赤字が出ないくらいまで改善して、これで行けるなど感じ始めていた頃、メディアに取り上げられるようになりました。そして開店の翌年、テレビ番組『料理の鉄人』に出演し、パティシエ八人目の挑戦者として初めて鉄人を破った。それからは行列が駅まで続いているんじゃないかと思えるほどお客さんがやってきて、作っても作っても作り切れないという日々が続いたんです。

——その後も菓子作りの現場に立ち続けながら、さまざまなスタイルの店舗を世界に展開。二〇二二年にはペルーにカカオの自社農園を取得されました。

辻口 パリのサロン・デュ・ショコラに出た時に、何人ものフランス人から「辻口、ペルーのカカオを知っているか。今凄く注目されているんだ。食べてみる」って言われて、食べてみたら果実味があって凄くおいしかった。ペルー料理は日本とラテンがミックスされた部分があって、世界の食ジャーナリストが

選ぶベストワンレストランもペルーにあるんです。以前から面白い場所だと思っていましたが、実際に訪れてみてその食の奥深さをまざまざと感じ、ここで農園を買おうと決断しました。

自社農園では、カカオ豆の収穫から発酵まで一貫でできるの
で、唯一無二のオリジナリティーあるチョコレートが作れます。実からカカオ豆を取り出し、例えばバナナやオレンジと一緒に発酵させると、その香りが豆に

故郷を襲った能登半島地震 その復興に食の分野で貢献していく

——今年元日の能登半島地震では故郷が大きな被害を受けました。

辻口 能登で生まれて一八歳まで育つて、その一八年間にパティシエになるという自分の将来を決めた場所ですから、故郷に対する思いは特別なものがあります。震災後は、少しでも地元の方々に安らぎを与えられればと、すぐに炊き出しに行きました。また、七尾にある僕の店も被災

移るんです。ここまでやっていくシヨコラティエは、日本では僕のところだけだと思います。

——辻口さんのお菓子は進化し続けていますね。

辻口 お菓子屋さんには常に同じものを作っていればよいわけではありません。「モンサンクレールは今も進化してるよね」と言ってもらえるように、常に創造的な破壊を繰り返しながらブラッシュアップして、いいお店をつくっていきたいですね。

し、お正月の販売用に準備していた「YUKIZURI」という能登の素材を使った焼き菓子が売れずに倉庫に積み上がったままだったので、何千箱ものお菓子を被災地に配って回りました。

そんな活動に共感してもらえたのか、全国のパティシエや料理人をはじめとするさまざまな方が、僕のインスタグラムを通じて義援金活動に協力してくれました。四月には三〇〇〇万

円を超える義援金を、馳石川県知事に直接お渡しすることができました。

——能登半島の復興には何が必要でしょうか。

辻口 和倉温泉の復活が一丁目一番地だと思います。和倉温泉には震災前は年間二〇〇億円近くの宿泊及びそれに付随する需要があったので、そこを起点に、旅行者やインバウンドが奥能登の珠洲や輪島へと周遊していくことが期待できます。

能登半島は「能登の里山里海」として、二〇一一年に日本で初めて世界農業遺産に認定された場所です。棚田やボラ待ちやぐら、揚げ浜式製塩や魚醬「いし



被災地で焼き菓子「YUKIZURI」を配る辻口氏
(辻口氏 Instagram より)

る」など、次世代につなぐべき伝統が残っています。良い食材があるから、素晴らしい料理屋さんや旅館がある。そこに、祭りという伝統文化や輪島塗などの工芸が結び付く。近年は奥能登国際芸術祭が開催され、アートと食がうまく絡んできています。まさに、スペイン・バスク地方でサン・セバスティアンの食とビールバオのアートが結び付くような関係が能登にはあるんです。

そして、歴史を振り返ると、七尾城の畠山家から小丸山城の前田家が茶の湯の文化というものを残し、その中に長谷川等伯の世界観もある。そういう歴史や日本人としての魂のよりどころとなる場所をしっかりと残していきたい。こんなにも恵まれた能登ですから、必ず復興できると信じています。その中で、僕は食の部分で能登の復興や地方創生に役に立ちたい。それがこれからの目標だし、ライフワークだと思っています。

——本日は、ありがとうございます。

地域の底力

兵庫県養父市

先例にとらわれない
官民それぞれの挑戦が
地域を切り拓く
兵庫県養父市

幅広い世代への多彩な支援から、
農業をはじめとする規制改革まで、
兵庫県養父市の画期的な挑戦の数々が、
広く世間の耳目を集めている。
市民もまた、それぞれの立場で、
あらたな試みに挑み、まちは前進を続ける。

取材・文 山内史子
写真 野瀬勝一

6月の夜、数多のホタルが光の筋を描く、兵庫県内有数のホタルの名所として知られる養父市奥米地地区「ほたるの里」。敷地内の宿泊可能な「自然体験学習館『めいじ』」などの施設を利用して、地域の自然に関して通年学ぶことができる。



養父市の特産品の代表格は、江戸時代から受け継がれてきた在来種の「朝倉山椒」(左上)とその加工品。最近ではニンニクも認知度が高まっている。

時代の変化に応じた積極的な支援と改革

兵庫県北部の但馬地域に位置する養父市は、二〇〇四年に養父郡八鹿町、養父町、大屋町、関宮町の四町が合併して誕生した。約二万人が暮らすまちは、県下最高峰の氷ノ山のほか標高一〇〇〇メートル級の山々に囲まれ、森林が八割強を占めるなど、豊かな自然に恵まれている。市の全域が中山間地域に当たり、その営みを支える農業が経済の要だ。

初見では正しく読みづらい市名は、実は「やぶ医者」の語源といわれる。五代将軍・徳川綱吉の御

「市民のみなさんが快適で豊かな生活、幸せな生活を送れるのなら、どんな交渉の場にも立てます」と、市長の広瀬栄氏は語る。

殿医を務めた養父出身の名医・長島の庵にあやかるべく多くの医者が「やぶ」の看板を掲げたため、逆の意味で根づいたと語るのは市長の広瀬栄氏だ。

広瀬氏は民間企業勤務を経て一九七六年に旧八鹿町役場の職員となり、二〇〇八年から現職を務める。就任以来、多くの改革を行い、結婚、出産、医療、教育といった若い世代に向けたサポートも周辺に先駆けて手厚く行ってきた。

「少子化が進む地域にとって子どもは宝ですから、まちの持続のために必要な施策として進めてきただけのことです」

広瀬氏は控えめに語るが、現に移住者が増えている。市の「やぶ暮らし住宅支援制度」を利用し定住につながった実績は、二〇二三年度までの五年間の累計で二五九組、五五一名を数え、移住を案内する情報誌の「住みたい田舎ベストランキング」ではここ数年、近畿エリア一位に選ばれている。

基幹産業である農業においても、助力を惜しまない。農業委員会の同意を得て、農地権利移動許可事務を市が行えるようにしたほ

か、農生産法人(現・農地所有適格法人)の設立要件緩和、企業による農地取得の実現(現在、一二法人が営農中)といった規制改革を進めてきた。こうした規制改革の進展は、二〇一四年の国家戦略特区指定が後押ししたと広瀬氏は話す。

「農業従事者が減り耕作放棄地が増える状況を変えるべく、新規就農者を増やしたいと思っても、現行制度では無理でした。しかし特区の指定を受けたことで手をつけられずにいた提案が受け入れられ、実現することができました」

高齢者に向けては、シルバー人材センター会員の就業時間拡大、タクシー事業者と連携した自家用車利用のライドシェアサービス「やぶくる」など、暮らしの充実に向けた特例が特区指定とともに認められるようになった。コロナ禍前から始まったテレビ電話による服薬指導など、養父市の特例から全国に広まった規制改革は少なくない。

「移動手段の確保を含め、たとえ過疎地であっても豊かに暮らせることが市民の権利ではないでしょ



八鹿地区、妙見山の中腹に立つ「名草神社」は、写真の三重塔のほか本殿、拝殿が国の重要文化財に指定されている。三重塔は江戸期寛文年間に行われた出雲大社大改修の際、銘木として知られる妙見杉を提供した返礼として譲渡された。

うか。制度を理由にできないと言うのは簡単ですが、正すべきは是正し、市民が普通の生活を当たり前にできるようにするのが行政の役目。社会制度は世の中の変化に合わせて変えていくべきだと思っています」

通年雇用の持続を思い異分野に乗り出す企業

先例にとられない挑戦は、市中にも見られる。二〇一五年からニンニク栽培に進出した「ナカバヤシ」の兵庫工場もその一つだ。

大阪市に本社があり、アルバムやノートといった紙製品、事務機器などを扱うナカバヤシは、



収穫したばかりのニンニクと、ナカバヤシのニンニク畑。約10年前の耕作放棄地は、開墾を経て立派なニンニク畑へと変貌した。



(写真提供：ナカバヤシ広報IR室)

一九二三年の創業。兵庫工場は一九七三年、旧大屋町の時代に操業を始め、同社の主力である製本事業を担ってきたと、工場長の竹内徹氏は話す。

かつて大屋地区には日本有数の製本事業を担ってきたと、工場長の竹内徹氏は話す。

かつて大屋地区には日本有数の製本事業を担ってきたと、工場長の竹内徹氏は話す。

かつて大屋地区には日本有数の製本事業を担ってきたと、工場長の竹内徹氏は話す。

かつて大屋地区には日本有数の製本事業を担ってきたと、工場長の竹内徹氏は話す。



「製本は職人技を要しますが、人の出入りが激しい都市部では技術の継承が難しい。跡継ぎが多い地方なら、長く勤めてもらえるのではとの思いから進出を決めたと聞いています」

製本事業は平成の半ばにピークを迎え、電子化など時代の変遷とともに減少傾向が続いていた。それを補完するべく活路を見いだしたのが、秋に植えて春に収穫するニンニクだったと、竹内氏はあらたな挑戦の背景を語る。



ナカバヤシ兵庫工場長の竹内徹氏（右）と、生産管理課長の滝野正人氏（左）はともに地元出身。夏は農業、冬は出稼が一带の慣わしだったが、ナカバヤシをはじめとした企業の進出が、多くの通年雇用につながったという。

近年は発酵食品やきな粉ブームが追い風となり、八鹿浅黄の栽培は追いつかないほど需要が高まっている。きな粉は、豆の風味が驚くほど豊かに立つおいしさだ。



ベストテンに入るまでに。その半数を、ナカバヤシが占める。

「長年、製本技術は社外秘とされ、見学すら一切受け入れてこなかったのですが、ニンニク栽培をきっかけに受け入れを始め、役所や近隣の農家さんなど地元とのつながりが生まれたのが最も大きな変化です」

竹内氏の言葉を、滝野氏が継ぐ。

「市が推進する食育の授業で先生を務め、弊社のニンニクを使った給食を子どもたちと一緒に食べるとい、初めての経験をさせてもらいました」と、小学校の教壇に立った記憶を振り返り笑顔になった。

若い世代に寄り添い 移住、就農をサポート

農業は移住者を引き寄せる力にもなり、とりわけ若い世代の関心が高まっている。そんな現状を語るのは、二〇一七年の設立以来、市と連携しながら移住相談窓口を担う一般社団法人「田舎暮らし倶楽部」代表の西垣憲志氏だ。

「若い方たちは自然農法やオーガニックといった食の安心・安全への思い入れが強く、子どもには自分で作った確かなものを与えたいという方もいらっしゃいます。国家戦略特区で農業改革が行われたことを知り、養父市は農業を始

田舎暮らし倶楽部では、地元で開催される移住説明会にとどまらず、東京や大阪のフェアに出向くことも多い。西垣氏は「右肩上がりの社会で生きてきた僕らが今の若い世代の気持ちをキャッチするには、カウンセリングマインドが大切」と、移住相談に際しての心構えを語る。(写真提供:田舎暮らし倶楽部)

めやすそうだと
思われる方も増えてきました」
田舎暮らし倶楽部への相談を経て、これまで多くの家族が養父市への移住や就農を果たした。一方で農業未経験者からの相談も多い

が、収入や労働時間といった現実
にふれ、夢をあきらめた人も少なくなかったという。

それなら

自分たちが「稼げる農家」のモデルになり、移住・就農の相談者に少しでも希望を与えられるようになるうと、田舎暮らし倶楽部では絶滅寸前だった在来品種の大豆「八鹿浅黄^{やうのあきぎ}」の栽培に着手。大豆の加工技術を一から学び、きな粉や味噌の商品化を実現した。こうした商品は地元の量販店や通信販売でも人気を博しており、「八鹿浅黄」の知名度は大きく向上したという。

「八鹿浅黄そのものの需要も増える中、市内での栽培量の拡大を狙い数年前に在来種研究会を立ち上げました。今では大豆栽培を始める人が増え、中には離農した高齢者が復活したケースもあります」と、西垣氏は話す。

二〇二三年には農業体験を目的と



左/デザイナー、教員、版画家など多彩な経歴を重ね、現在は農業と移住促進に励む田舎暮らし倶楽部の西垣憲志氏。上/農業体験の申し込みは家族連れも多く、地元の小学生が参加すること。(写真提供:田舎暮らし倶楽部)



した「駅近百姓塾」を発足させ、年間を通して農業体験ができる環境を整えらるとともに、農場に隣接する古民家をゲストハウスとして用意し、希望に応じて、長期間の農業体験にも対応できるようにした。

「より多くの方がご家族で養父



上／誕生直後の子豚を取り上げる、八鹿畜産養豚部の島垣緑氏。子どもたちに向けた食育の授業では、繁殖から手がける養豚業の説明とともに、「命をいただくことの大切さ」を語る。

(写真提供：(株)ビーナッツ)

下／事務所を飾る多数の豚グッズは、新たに生まれた緑の広がりをお語る贈り物が中心。



市に移り住み、ここをふるさととする子どもたちが増えていくのがわれわれの願いです。そのために、農業や養父市に夢を求める若い世代の心に、できるだけ寄り添いたい。移住者が増えれば新しい風を吹き込み、地域の人の意識が変わるかもしれません。ゆくゆくはこの活動を次世代につないでいきたいとも考えていますが、思いを託すためにはまず、われわれが地域に愛着をもって暮らすことが肝心だと思っています」

一軒残った養豚農家の起死回生に向けた挑戦

養父市で生まれ育った若い世代にも、チャレンジは見られる。二〇一三年に「おだきさん家の八鹿豚」というブランドを立ち上

げた、八鹿畜産養豚部の島垣緑氏もその一人だ。実家の小田垣家が営む養豚業に両親、弟とともに携わり、約千頭の豚の世話から経理事務、営業まで幅広くこなしている。

養父市にはもともと七戸の養豚農家があったが、後継者不足や飼料の高騰など諸々の事情により廃業が進み、二〇一二年には祖父の代から続く小田垣家一戸だけという危機的状況に陥った。

「廃業寸前まで追い込まれ、なんとか生き延びたいという必死の思いから生まれたのがブランド化でした。給料をぎりぎりまで抑える苦しい時期が続きましたが、豚肉のおいしさや安心・安全を消費者にいかにつたえることができるかを考えるいい機会だったと、今は思えます」

畜舎は、市の中心地から離れた山奥。健やかな山の水を与えられ、自然豊かな環境でストレスなく育つ豚の飼料には、乳酸菌など天然由来の栄養が加えられている。さらには祖父が始めた養豚業が、軒下で飼う残飯養豚だったことにも思いが至ったという。



おだきさん家の八鹿豚はハムやベーコン、ソーセージといった加工品が多種そろい、贈答品としても人気が高い。

「時代や方法は違いますが、エコフイードの先駆けともいえる祖父のスタイルを受け継ぎたいとも考え、差別化を図る意味でも地元菓子の店ですべてのケーキの切れ端を飼料に混ぜるようになりました」

立ち上げに向けたブランド名の考案やロゴマークの作成は、島垣氏自身が手がけた。これまで接点が多かった市役所や商工会にも足を運び、存続への熱い思いを語ったことで、市内はもろもろ但馬地域内で支援の声が広がり、市のブランド推奨品「やぶの太鼓判」にも認定された。尽力のかいあってうま味、甘味が際立ち、脂身がとろける豚肉のおいしさは認知されていく。知名度の向上とともに、小学校での食育授業を依頼される



機会が増え、子どもたちとふれあう時間も得られるようになった。

現在は事業の拡大や法人化を目指すとともに、豚皮を使った革製品の製造など、恵みを余すことなく活用することも念頭に置いているという。

「いずれは豚のテーマパークを、という夢も持っています。うちの豚の知名度向上が、雇用を含めた地元への貢献になればという思い

養豚場があるのは、緑に包まれた畜産団地内。「うちの豚はいつも熟睡していて、簡単には起きてくれないうです」と、健やかに育つ様子を島垣氏は笑顔で語る。(写真提供：(株)ビーナッツ)



「八鹿豚を但馬牛のようなブランドに」との思いを込め、島垣氏は高校時代に「日本学校農業クラブ全国大会」で家業について語り最優秀賞・農林水産大臣賞に輝いた。自ら筆を執った「八鹿豚」の文字は、その意志の表れのように力強い。



「農業はすべての原点であり、有機農業もアートだと松田一戯さんが言ってくれました。だから僕は、畑のアーティストです」。そう照れくさそうに語るおおやアート村理事長の金谷智之氏は、地元のホールで音響オペレーターも担っている。

人のつながりを生み心を育むアートの拠点

も生まれました。食育授業を通じて知り合った子どもたちのお手本にもなりたいたいですね。上手に商売をされている先輩方は、いつも笑顔。大人が楽しそうに過ごしていれば、故郷を離れた子どもたちも帰ってくるのではないかと思います」

市民の心に彩りを与える存在として注目したいのは、NPO法人「おおやアート村」の拠点として二〇一二年にオープンした大屋地区の「BIG LABO」だ。二〇一〇年に廃校となった県立高校の建物を施設としてそのまま活

用。木彫りや木工、絵画、書道といった各種教室の開催やアーティストに向けた貸しアトリエの提供、体育館での企画展などを行っている。施設内には地元ゆかりの作家の作品が多数展示され、歩くだけで自然とアートにふれられる。

理事長の金谷智之氏によれば、地元出身の木彫作家・松田一戯^{かずき}氏を慕って平成の頃から多くのアーティストが移り住み、自主的な作品展が開かれていたとか。その流れから、アートでまちに賑わいをとの目的で養父市が「おおやアート村構想」を掲げ、兵庫県に掛け合せて建物が譲渡されたという。

「明延鉦山があつた大屋は、関係者の出入りが昔から頻繁だったせいか、外から来たアーティストに対して『よう来んさつた』と受け入れる土壌がありました。ラボの誕生以降も、その存在に惹かれて国内外から作家さんが移住してくる流れが続いています。住民にも少しずつ施設が存在が認知され、ふらっと立ち寄っていたいたり、近所の方が趣味を活かして『大屋手づくり市』に参加してく



上／体育館を利用する展示では、来場者の作品が会場をつくり上げる企画もある。下／子どもたちが遊びを介してアートにふれる、ワークショップの準備中。画家の田中今子氏（右）は緑あつて養父市に移住し、おおやアート村の初代理事長を務めた。アーティスト羽瀬祐輔氏（左）は、Uターン。ともに施設のアトリエを利用している。

れたり、若い世代やアートとは関係のない仕事をする方が活動を手伝ってくれたり、年々人が集まるようになってきました」

そう語る金谷氏の本業は、有機栽培を手がける農家。ラボのオープン直前、準備のために夜遅くまでついていた明かりに引き寄せられたのが縁で、経理など事務作業を手伝う形で関わるようになったという。

ラボではワークショップをはじめ子どものためのプログラムが充実しているのに加え、夜間も利用できる多目的の研修室や、雑貨から野菜まで販売する「日曜購買部」など、大人向けのメニューも多い。



養蚕農家だった築約一八〇年の古民家を、ギャラリーとして活用した「分散ギャラリー・養蚕農家」。養父市を拠点とするアーティストは多く、展示施設以外のまちなかでも各所で多数のアートにふれられる。

「アフターファイブの娯楽がない田舎ですが、例えば一日中、畑で黙々と働いた後、ここに来れば別の刺激を受ける。そんな時間を、僕自身が楽しんでいます。今後は



天滝溪谷の遊歩道を溪流沿いに登れば、「日本の滝百選」にも選ばれた落差98メートルの「天滝」の絶景が見られる。養父市内には、ほかにも豊かな自然にひたれるトレッキングコースが複数設けられている。

食に関するイベントなど、アートとは異なるジャンルも取り上げながら、多様な出会いが生まれる場所を地域に提供し、住民があらたな発見や癒やしを得られる環境をつくっていきたいですね」



上／マンガもまた、日本が世界に誇るアートの一つ。人気コミックを並べたとともに憩える空間は、かつての校長室だ。左／玄関のロッカーをはじめ、施設内の各所で多種多様なアートが見られる。

日本の中山間地域の 営みを守り継ぐために

市民の豊かな暮らしのため、行政の改革は、この先も重ねられる。市長の広瀬氏は、中山間地域であるがゆえの課題を全国に通ずるものとしてとらえていると話す。

「日本の国土の約六割強、耕地面積の約四割が中山間地域にあります。国民の約一割が暮らし、食料生産、洪水や土砂災害の防止といった多くの重要な機能を持っています。中山間地域に位置する養父市の挑戦は、同じ環境のほかの地域の課題解決にもつながると思っています」

二〇二一年度には将来のウェルビーイングなまちづくりに向け「やぶ2050（居空間構想）」が定められた。

「今の社会は複雑多様かつ、不確実で曖昧。正解を出すのが難しい状況下で、人々が孤立せず、生きづらさを感じない社会を目指しています」

農業、子育て、福祉の充実といったこれまでの取り組みは、より充実が図られる。加えて、普及率が

（写真提供：養父市立あけのべ自然学校）



日本屈指の錫の産出を誇った明延鉱山跡は、日本遺産「播磨貫く、銀の馬車道 鉱石の道～資源大国日本の記憶をたどる73kmの轍～」の構成遺産の一つ。坑道内は見学（要予約）ができ、4～11月は稼働時さながらに走る「一元電車」に乗る機会もある。

九割を超えるマイナナンバーカードと連携したデジタル技術の活用、下水から感染症の状況を解析する下水サーベイランスのような先駆的な試みも進められている。

「市役所では、二〇一八年から行政マネジメントの観点で人材育成を強化しています。課題に対してマネジメント的な発想が自然とできるようになりたい、との考えからです」

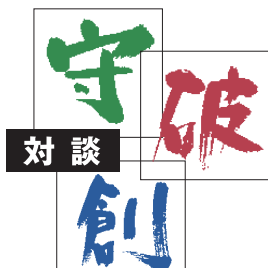
のどかな景色に和む養父市を巡り、何度か耳にしたのは、「働き者で、ときに頑固なほど真面目」という地

域特有の気質だ。豪雪地帯という環境が影響しているのかもしれないが、多くの人が厳しい環境に屈せず、自身で突破口を見つけて未来を切り拓こうとする姿が印象深かった。

官民それぞれの挑戦はまだまだ続くことだろう。その先に実る、先例のない成果に期待したい。



鉢伏山中腹、標高約700メートルに約180枚の棚田が広がる「別宮の棚田」。「日本の棚田百選」に数えられる眺めを、兵庫県では最高峰の水ノ山が彩る。



関節リウマチなどの自己免疫性疾患に対し、西洋医学と東洋医学の両面から治療を行っている医学博士の津田篤太郎氏。思想の異なる両者を取り入れる理由とは何だろうか。金融規制、経済政策にも通じるアプローチとは。国際的な金融規制の形成に長年携わり、^{えききょう}易経についての著書もある氷見野良三副総裁と語り合う。



日本銀行副総裁

氷見野良三

HIMINO Ryozo

1960年富山県生まれ。83年東京大学法学部卒業、同年、大蔵省入省。99年から金融監督庁・金融庁に勤務。パーゼル銀行監督委員会事務局長などを経て、2020年金融庁長官。21年東京大学公共政策大学院客員教授。23年3月より日本銀行副総裁。

西洋と東洋、最先端と伝統 異なる視点で難題解決に挑む



医学博士・新潟医療福祉大学教授

津田篤太郎

TSUDA Tokutaro

1976年京都府生まれ。京都大学医学部卒業、北里大学大学院修了（専攻は東洋医学）。東京女子医科大学附属膠原病リウマチ痛風センター、JR東京総合病院リウマチ膠原病科、北里大学東洋医学総合研究所医史学研究部、聖路加国際病院 Immunorheumatology Center、NTT東日本関東病院リウマチ膠原病科部長を経て、新潟医療福祉大学リハビリテーション学部鍼灸健康学科教授。日本東洋医学会漢方専門医、日本内科学会認定内科医・総合内科専門医、日本リウマチ学会リウマチ専門医・指導医、米国内科学会正会員。著書に『漢方水先案内：医学の東へ』（医学書院）、『ほの暗い永久から出でて 生と死を巡る対話』（上橋菜穂子氏との共著、文藝春秋）ほか多数。

西洋医学での限界を感じ、突破口を東洋医学に求めた

氷見野 幅広いご活動をされている津田先生ですが、医師としては

自己免疫疾患を主に追究なさっています。西洋医学、東洋医学の両方から病気にアプローチしていますが、なぜその方法を選んだのでしょうか。

津田 西洋医学では限界があるということです。西洋医学の得意分野は感染症や悪性腫瘍ですが、これらは原因と結果が一对一で結び付いて、原因を取り除けば良くなるという方法論が極めて有効です。ところが、免疫や神経系の世界になった途端、病理のメカニズムは非常に複雑になり、原因と結果を結び付けて説明することが困難になります。免疫の疾患では、そもそも自己と非自己の区別が絶えず揺らいでいる。非自己だったものが栄養として体に取り込まれると自己になるし、排出されると非自己になる。ずっと入れ替わりをしながら生体が成り立っているの、非自己のみを見分けて都合よく排除するのは至難の業です。

そういう疾患において、西洋医学で治しきれない症状をもう少し何とかできないのかと思い、全く違う方法論のものを探そうということで、東洋医学を勉強し、漢方専門医の資格を取りました。

氷見野 私は銀行の規制、監督の仕事が長かったのですが、非常に似ている気がします。問題がはっきりしているところにしっかりと対応して、その原因を取り除けばいいというのは国際的には標準的な対応です。例えば不良債権問題であれば、不良債権をより分けた上で処理し、必要ならば資本を補うなどして経営を健全化すれば良いという考え方があります。しかし、不良債権問題自体は解決したはずなのに、銀行はリスクを取って貸し出すことをしなくなり、経済全体の元気が落ちてしまったという場合にはどうしたらいいか。西洋医学的な原因を取り除く対応で成果が出て、残った問題をどう片付けるかについてはなかなか答えがありません。東洋医学的なアプローチの中に答えがあるのでしようか。

津田 今のお話は、がん治療に似

ていると思います。西洋医学のアプローチで異常な細胞を全部やっつけようとして薬を使うと、正常な細胞にもダメージを与えてしまいます。しかし、それを元気にする治療は西洋医学では発達していません。そこに漢方が役立つ部分があるのではと思っています。

医者には常にキュア（治療）の話ばかりしたがるんですが、患者は時にケアを求めている、そのギャップに非常な不満を持っているんだらうと思うんですね。西洋医学のレベルが目覚ましく上がっていつている中で私が漢方をこれだけ取り上げているのは、専門家以外の視点を加える、ケアの視点を組み込む意味で、今まで遅れたものとされてきた東洋医学、漢方に大いなるポテンシャルがあると見たからです。科学史家のトーマス・クーン（注1）の著書『科学革命における本質的緊張』に「伝統に最も忠実である者こそが伝統を乗り越えることができる」という言葉があるそうです。西洋医学で次々と新薬や方法論が開発されていますが、それでも超えられない壁があるなら、むしろ伝統的な

ものの考え方を丹念にたどり、時代遅れとされるものに着目したほうがブレイクスルーをもたらすことができるのではないかと思います。氷見野副総裁は易経の本（注2）を書かれています、現代の難問を乗り越えるには、思い切り古いものを持ち出すことが方法論として考えられるかもしれません。

テクノロジーが進歩する中で専門家が為すべきこと

氷見野 銀行監督の分野では、全ての銀行に同じルールを当てはめる規制と、一つ一つの銀行に個別に対応する監督があり、国によってどちらを重視するかにも違いがあるような気がします。その世界観の違いは西洋医学と漢方の関係に似ているようにも思います。一人の医者が両方の世界観を持って患者さんに接するというのは、結構しんどい作業ではないでしょうか。

津田 確かに難しいことではあります、非常に知的な作業で、それが興味を惹かれるところでもあります。

医学では、よく統合医学という言い方がされるのですが、私は、

無理に統合することはないと考えています。違う視点を持つからこそ立体的に見えるのです。

氷見野 経済政策の分野でも、学

界から当局まで国際的に共有された基本的な考え方があります。

もちろんそれは大変役に立つのですが、日本経済とアメリカ経済の性質には違いがありますし、国際的な標準を機械的に当てはめることには違和感を覚える場面もあります。かといって国際基準に匹敵しうる新たな考え方を提示できるかという、なかなか難しい。その点、医療ではいかがでしょうか。日本から西洋医学ごと変えるようなものを生み出すというのは。

津田 一つ極端な例を挙げると、胃がん治療がありますね。アメリカでは手術はそこそこの放射線や抗がん剤治療をするのがガイドラインとしてあったのですが、

（注1）トーマス・クーン（一九二一年―一九九六年）／アメリカの哲学者、科学者。マサチューセッツ工科大学教授、米国科学史学会会長など歴任。バラダイムの提唱者として知られる。著書に『コペルニクス革命』『科学革命の構造』など。

（注2）易経の本／氷見野副総裁の二〇一一年の著書『易経入門 孔子がギリシア悲劇を読んだら』（文春新書）。

日本では、外科医のテクニクが極めて優れていて手術の成績が良かったため、アメリカの標準治療をそのまま当てはめるべきではないという意見がありました。ただ、最近、医師の労働環境の問題や技術面の進歩などがあり、再びアメリカ標準に近付いているようです。

こうしたことは診察の場でも見られます。昔は脈や聴診器だけで的確に診断できる医師がいましたが、機器開発が進み、エコーなどの画像検査に頼るようになりました。

このように、職人芸の類はほとんど人間の手を離れていっています。いずれは診断もAIがやるようになるかもしれません。もしそうなったら、最後には、「検査結果で得た情報を誰が責任を持って患者に説明するのか」という問題が残るでしょうね。患者が何を求めてその医師を信頼するのかということが問われてくると思います。

氷見野 専門家がきちんと筋の通った説明をするというのは最低限必要なことだと思いますが、全体像を伝えるという点で、東洋医学のほうが伝わりやすいという面はあるのでしょうか。

津田 東洋医学に限らず、長い歴史の淘汰に耐えて受け継がれてきた古典の知恵は、おしなべて、「人間は、同じように過ちを繰り返したり、似たようなことを何度も発見したり発明したりしているんだよ」と語っている気がします。それを——易経は特にそうですが——極端にコンパクトな、意味が分からないぐらいに切り詰めた言葉で言っている。表面的な差異にとらわれず、あらゆるものは普遍的な規則性の中で変化しているという見方に立てれば、どんなに複雑な話でも、端的に本質を把握して一つの視野に収めることが可能なだろうと思います。

先ほどの問いの答えになります。が、錯綜する状況の中でも本質をつかみ取り、それを有限の言葉で表現できる人が、患者に信頼してもらえたり、国を引っ張っていくのかもしれない。

氷見野 私は逆に、易経は、物事を単純に捉えて一つの答えだけ見ている人に、そんなに単純じゃないよと伝えているような気がします。世の中一筋縄ではいかなくて、いいことだと思ってやってもどこ

かで逆になることもある。分かっていたはずのことを分からなくするための道具のようにも思うのですが。

津田 でも、まさにそれが希望であつたりしますよね。「分からない」というところに人間は希望を見いだしている気がします。職業柄「あと三カ月くらいです」と余命告知を強いられる場面もあるのですが、「でも分からないよ」というところに、人間は希望をつなぐのだろうと思います。

新日銀券肖像の 北里柴三郎より 進取のスピリットを受け継ぐ

氷見野 自己治癒力の位置付けは、東洋医学と西洋医学では違うのでしょうか。

津田 それは大きな違いがありませんね。基本的に西洋医学の考え方は、放っておいたら悪くなるからとにかく手出ししろというものです。一方の東洋医学は、自己治癒が基本です。その自己治癒力をどうやったら助けられるかを第一に考えます。

氷見野 その点は経済政策の場合

では、短期、中期、長期の期間によつて違ってくる気がします。経済が落ちているときには需要を引き出すようなことをしないといけません。一年で見るのか、五年、一〇年で見るとかが話が変わってきます。応急処置的に強い薬を使うけれども、その薬の影響で自己治癒力に段々副作用が出てきたときに、医学の世界ではどういう対応が望ましいのでしょうか。

津田 ぱつと思いつくのは、ハーフレクトという考え方ですね。例えば塩分不足に陥っているときに、血液データから試算して全量を補うのではなく、半分だけ補ってまた評価するというやり方です。

補った量以上に正常値に近づいていく場合は自己治癒力が働いていることになり、期待した効果が出ない場合は、さらに補う量を追加することになります。

そうしているうちに他のデータがそろってくるとか、見えていなかった問題点が浮上してくることもあるので、時間を稼ぐという意味でも有効な方法です。

氷見野 漢方では、症状に合わせて治療を選択し、思わしくなけれ



が、漢方では、主訴が一番先に治

るとは限らないと考えている節があります。治しやすいようなものから働きかけていって、次第に主訴に手が届くようになる、というアプローチです。

氷見野 そのアプローチが、なぜ東洋医学だと許されるのでしょうか。

津田 東洋医学の場合は、芯は外していても部分的には当たっているという、きめの粗い効き方をします。「将を射んとする者は馬を射よ」みたいな話ですけれど、頭痛で来たのに便秘の薬を出してみたり、眠れないと言っているのに

生理由の薬を出してみたり、患者さんには「薬の能書きの適応症にはこう書いてあるけれど、これはほんとは気を巡らす薬だから」などと説明すると案外納得して飲んでくれます。曖昧模糊とした東洋

医学の概念とか言葉は西洋医学と随分違う。特に慢性病で動きの少ない局面において、西洋医学は手詰まりになりがちですが、東洋医学はぼんやりとしているものなの

にがしかの手が打てる。そのうち、症状の全てが改善したわけではな

なるのです。

氷見野 経済政策でも、実務家の間では、特効薬みたいなものを考えるのは危ないんだ、効き目は強くないがひどい副作用はない政策の方が良いのではないか、という感覚を持っている人は多いように思います。

ただ、例えば、金融危機や不良債権問題への対応について、手術を先延ばしにして問題を大きくしたという批判もあります。必要なときには思い切った対応も辞すべきではないですが、その見極めは難しいですね。

津田 「戦争を始めるより平和を続けることのほうが百倍難しい」というような話に似ているかもしれないですね。平和を守り抜いても評価されなかったりしますから。歴史的視点を持つことが大事なの

かもしれない。何かをやったことに関して、相応の時間をかけて

評価をする、ということですね。
氷見野 ところで、今年七月に日本銀行券が新しくなったのですが、千円券の肖像は北里柴三郎です。津田先生は北里研究所で漢方を研究されたわけですが、北里柴三郎

というと、私のイメージでは伝染病の研究で、西洋医学の人です。

津田 北里柴三郎が西洋医学に出会ったのは、ちょうど西洋医学が感染症学の分野で成功を収めて、学問分野として急速にランクを上げていたときですね。この勢いに乗ろうという進取の精神があったのだと思います。

北里柴三郎はそれで大成功して、日本の医療の礎を築いたわけです。これからは逆の順番で、西洋医学が乗り越えられなかった課題をクリアするのに東洋医学が必ずや見直されるだろうと私は考えて北里研究所で仕事をしていました。そういう意味では、北里イズムみたいなものを共有しているのではないかと自負しています。

氷見野 日本での西洋医学を新たに切り開こうとされた北里柴三郎と、西洋医学全盛の中でその行き詰まりを東洋医学で打開しようという津田先生。ベクトルは違っても、そのスピリットは共通しているということですね。今日は新日銀券にもふさわしいお話になったかと思います。本当にありがとうございます。

ば別の治療法に次々と変えていくそうですね。それは見立てが最初は間違っていたということなのでしょう。それとも、そのプロセスが当たり前ということですか。
津田 ざっくり言いますと、漢方では見立ての間違いを許容しているということ。漢方は薬の効き方がマイルドで、少々見立てを外しても大事になりにくいんです。それと、間接的アプローチに重きを置くという特徴もあります。西洋医学では主訴を解決できてこそ医者という考え方がありますが

「地域金融サポートユニット」が始動 地域金融機関の経営基盤強化に向けた取り組みを 幅広く後押しする

地域経済の活性化が重要課題となっている中、二〇二三年十月、地域金融に関する情報発信を一段と強化するため「地域金融サポートユニット」が金融機構局に創設されました。調査・分析やモニタリングなどに関わる職員が部署の枠を超えて横断的に協働し、地域金融に関する情報をより強力に発信するための仕組みです。創設以降、七カ月（二〇二四年五月時点）の間にセミナー・ワークショップを一四回、論文・レポートの公表を七本行つなど、活動は精力的です。その取り組みの実態や、職員の思いをご紹介します。

地域の課題を共に考える

「地域金融サポートユニット」（以下、ユニット）は、その名の通り、地域金融をサポートするためのユニットです。メンバー固定の組織ではなく、金融機構局の関連部署の中で、テーマによって協働のメンバーが変わります。例えば、テーマがサイバーセキュリティならシステムリスク管理の担当者を中心に、地域の不動産リスクなら地域金融機

関のモニタリング担当者を中心にして、関係者が企画を具体化していきます。

もともと金融機構局には、主催セミナーなどを通して金融機関に情報提供をする「金融高度化センター」があるのですが、地域経済を支える地域金融機関の経営基盤強化に向けた取り組みをより一層後押ししようと、地域金融に関して一元的に情報提供できるユニットを発足させることになりました。取り上げるテーマは、①経営・リスク

管理、②地域経済や取引先企業が抱える課題解決、③経営環境の変化への対応など、広範です。

その創設の意義について、金融高度化センターの在籍が長く、大学で地域活性化の講師も務める企画役の北村佳之さんはこう説明します。

「地域経済は人口減少と高齢化などの影響を強く受けています。同時に、高度成長期に整備された公共インフラが老朽化して再整備の時期を迎えており、自治体の財政も苦しくなっています。こうした状況においても、新事業への融資や企業のマッチング、自治体や企業へのアドバイスなど、長い目で見て地域経済を支え、地域金融機関自身の経営基盤を強化するためにできることは決して少なくありません。では、より具体的にどんなことができるのか、



地域金融サポートユニットはテーマによって協働のメンバーが変わる

どんなやり方が考えられるのか、という情報を幅広く提供するのがわれわれの役割です。こうした情報提供のニーズは金融機関からも聞かれているところ。ユニットができたことで、情報提供のルートが一つにまとまり、地域金融機関とのパイプが太くなったのは非常に良いことだと思います」

実際に北村さんは、今年三月に「公民連携事業（PPP／PFI）の推進に向けた地域金融機関の取り組み」と題したオンラインのワークショップを企画し、自ら講演も行いました。このときには、政府が公民連携を積極的に推進しているという最新情報を伝える

と同時に、各地で公民連携に取り組む当事者に登壇してもらい、四つの事例を紹介しました。こうしたセミナーをきっかけに自治体や地域金融機関の取組意欲が高まることも多いそうで、北村さんは「『今後は一段ギアを上げて頑張っていきたい』などの声を参加者から聞くと、企画者として達成感を感じます」とやがて口にしめます。

ペーパーからセミナーへ

ユニットができたことで、より充実した情報発信ができた実例を紹介しましょう。リサーチ・ペーパーの公表後、さらにセミナーを実施したというケースです。

調査企画課システム・業務継続グループのグループ長で企画役の中井大輔さんは、一五五の取引先金融機関を対象にしたアンケート調査をもとに取りまとめたリサーチ・ペーパー「金融機関におけるクラウドサービスの利用状況と利用上の課題について」を一月に公表しました。調査先の九割以上が既にクラウドを利用しているものの、重要領域である勘定システムでの利用は限定的という実情を明らかにしたペーパーです。その内容の重要性から、

このときは記者会見も行いました。従来であれば、重要な情報でも発信はここまででしたが、さらに中井さんは四月にオンラインでのセミナーを実施しています。そのときを、中井さんはこう振り返ります。

「ユニットによるプラットフォームを利用することで、情報発信がしやすくなりました。地域金融機関は専門人材の確保が容易ではないもので、対面のセミナーなどで新たに学ぼうとすれば移動の問題が生じますが、オンラインならそのハードルを下げつつダイレクトに情報をお伝えできます。言うなれば、情報格差を埋められるのです。このときは、セミナー後にペーパーへの



リサーチ・ペーパーの公表後オンラインセミナーを実施

アクセスが急増したと聞いています」

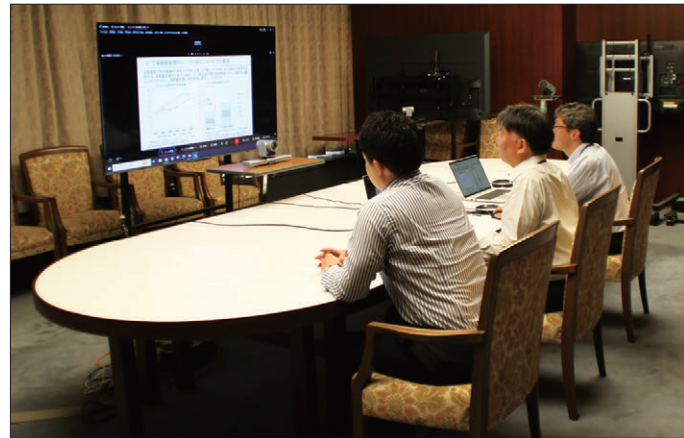
セミナーではチャットで受けた質問に回答するなど双方向性も実現し、より濃密な情報提供ができました。クラウドなどのシステム関係は日進月歩であるため、中井さんは「定期的に開催することで、最新情報をお伝えできるとともに、業界の動向をより鮮明にしていけると思います」と、今後にも期待を寄せています。

企画をどう立てるか

現状では一カ月に二回程度というハイペースで行われているセミナーですが、どのように企画されているのでしょうか。

「誰もが普段から問題意識を持って仕事をしているので、それを上司に伝える中で、また、ユニット創設以降は関係部署間でも意見交換しながら、『では、今度はそれをやろう』というようにテーマが決まっています。そのテーマについてどのように調査を進め、セミナーの形に仕立てていくか、担当者の役割は大きく、腕の見せどころです。登壇者の人選なども提案でき、やりがいがあります」

そう話すのは、金融高度化センター



ワークショップの様様

主査の中村伊知雄さんです。

中村さん自身は、昨年末に「地域金融機関による事業承継支援の取り組み」と題したワークショップを企画し、参加者に対してプレゼンテーションもしました。調査から丁寧に準備したといえます。

「私自身が直接、事業承継支援実務に携わっているわけではないので、専門誌や関係する行政機関の公表資料などを読んで実務上の論点などを整理するところから始めました。同時に、日頃、地域金融機関と接しているモニタリング部署に相談し、ヒアリングさせてもらったり、登壇してもらえば、どの金融機関がいいかなどのアドバイスも

受けました。このように各部署が持っている知見を集め、リソースの幅を広げてより有機的にシナジーを利かせられるのがユニットの意義だと感じています」

と中村さん。当日は、中小企業の事業承継が親族承継から第三者承継にシフトしつつある状況を踏まえた支援の取り組みなどを伝えました。

開催後はアンケート調査も行い、より有意義な企画や運営ができるように努めています。「もっと事例紹介を」「銀行と信用金庫を分けてほしい」などの声があるそうで、「模索しながらやっています」と中村さんは話します。

念入りの準備と運営

ところで、こうした情報提供の陰には、運営の苦勞もあります。現状のセミナー・ワークショップはオンラインのみの実施ですが、安定的な通信状態の下で完遂するには、入念な準備が不可欠です。その中心を担っているのは、金融高度化センター企画役補佐の小澤康裕さんです。ここに至るまでには試行錯誤があったと語ります。

「安定的な通信を確保するため、ユニット創設前から金融高度化センター



端末の稼働確認など入念な準備が不可欠

では、担当者みんなで知恵を出し合いながらノウハウを培ってきました」

例えばその一つは、セミナー開催時のモニター確認とバックアップです。講演中は参加者と同じ画面を表示し、映像や音声の乱れがないかをリアルタイムにチェックしています。同時に、講演者のそばにサブ端末を起動させておき、万一、講演中の端末に不具合が生じて、すぐにサブ端末に切り替えができる態勢を取っています。

また、ワークショップでは全国の地域金融機関の方々が登壇することもあります。これらの方々とも、必ず事前に本番と同じ環境で、疎通確認や、資料投影の確認をしています。

「幸いにして一度も講演途中で中止に至ったことはありませんが、今でも『これで終わります』のアナウンスを聞くまで気が抜けません。こうしたノウハウを蓄積していくことは一朝一夕にできることではないので、これを活用していけるのがユニットの一つのメリットだと感じます」

協働でできること

準備という点では、テーマ選定や企画立案のための動き出しも必要です。ここで重要な役割を担うのが、オフサイト・モニタリングなどで地域金融機関と日々接している金融第二課です。ユニットにおける役割を、同課の企画役の天野賢治さんはこう説明します。

「全国の金融機関のさまざまな層と接点があるので、共通する課題や関心がリアルに見えてきます。今なら、DXや人手不足問題、高齢化などです。そうした話から得た感触を、金融高度化センターと意見交換しています。また、金融第二課が専門とするリスク管理などについては、セミナーの企画を提案することもあります。このように異なる視点や情報を融合することで、よりニーズに合った情報を提供していける

と感じています」

地域金融機関との交流が深い金融第二課だけに、セミナー終了後には「もっと詳しく知りたい」などの意見を受けることも多くなったといいます。そうした体験から、天野さんはユニットの意義をこう話します。

「地域金融機関には、さまざまな情報をいただいているので、そこから見える共通の課題や役立つ情報を還元できるのは意味のあることです。枠組みを作ることがゴールではないので、セミナーでの反応や疑問を受け取りながら、さらに期待に応えられる情報を提供していければと思います」

（肩書などは二〇二四年六月上旬時点の情報をもとに記載）



2024年5月には地域活性化に関するセミナーを開催



日本銀行のレポートから

日本銀行は、1月、4月、7月、10月の政策委員会・金融政策決定会合において、先行きの経済・物価見通しや上振れ・下振れ要因を詳しく点検し、そのもとでの金融政策運営の考え方を整理した「経済・物価情勢の展望」（展望レポート）を決定し、公表しています。また、展望レポートの内容を、より幅広い読者に伝えるための取り組みとして、そのポイントをイラストとともに簡潔に整理した資料（ハイライト）を公表しています。本稿では、2024年7月の展望レポート（基本的見解は7月31日、背景説明を含む全文は8月1日公表）のハイライトをご紹介します。

*全文は、日本銀行ホームページに掲載されていますので、ご関心のある方は、ぜひそちらもご参照ください。

<https://www.boj.or.jp/mopo/outlook/index.htm>



「経済・物価情勢の展望」（展望レポート・ハイライト）

2024年7月



日本経済は成長を続ける

日本経済は、海外経済が緩やかな成長を続けるもとで、金融面からの後押しなどもあって、潜在成長率を上回る成長を続けます。

**物価は来年度以降
2%程度で推移する**

消費者物価の前年比は、今年度に2%台半ばとなったあと、来年度・再来年度は概ね2%程度で推移します。この間、一時的な変動を取り除いた消費者物価の基調的な上昇率は、徐々に高まったあと、2%の「物価安定の目標」と概ね整合的な水準で推移します。





日本経済・物価を巡る 不確実性は高い

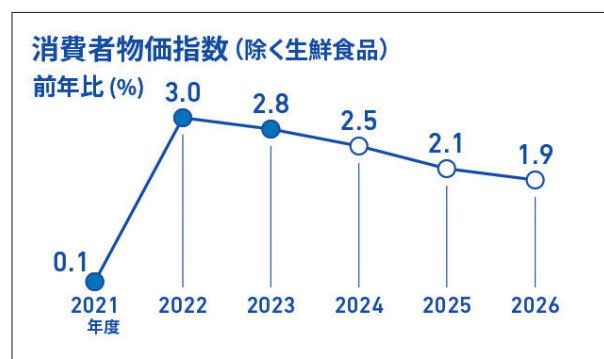
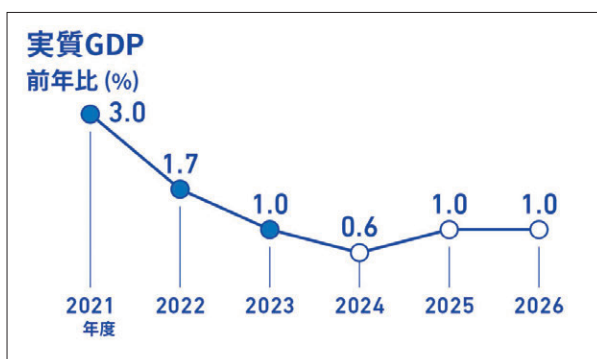
海外の経済・物価動向、資源価格の動向、企業の賃金・価格設定行動など、日本経済・物価を巡る不確実性は引き続き高い状況です。また、金融・為替市場の動向と日本経済・物価への影響にも十分注意を払う必要があります。

2%目標のもとで 金融政策を運営していく

金融政策運営については、先行きの経済・物価・金融情勢次第であるが、経済・物価の見通しが実現していくとすれば、それに応じて、引き続き政策金利を引き上げ、金融緩和の度合いを調整していくことになると考えています。



政策委員の経済・物価見通し



(注) ●は実績値、○は見通しです。



日本銀行のレポートから

日本銀行では、本支店・事務所が企業への聞き取り調査等を通じて行っている各地域の経済金融情勢に関する調査の結果を、「地域経済報告」（さくらレポート）として、年4回（1月、4月、7月、10月）の支店長会議の機会ごとに取りまとめています。

*全文は日本銀行ホームページに掲載されています。https://www.boj.or.jp/research/brp/rer/index.htm



「地域経済報告」（さくらレポート）

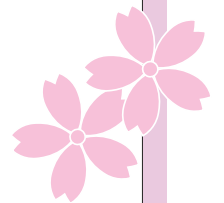
各地域の 景気判断の概要

— 二〇二四年七月 —

各地域の景気の総括判断をみると、北陸を除く八地域では、景気は、一部に弱めの動きもみられるが、「緩やかに回復」「持ち直し」「緩やかに持ち直し」としている。北陸では、地震の影響による下押しが一部にみられるものの、「回復に向けた動きがみられている」としている。

	【24/4月判断】	前回との比較	【24/7月判断】
北海道	持ち直している	➡	一部に弱めの動きがみられるが、持ち直している
東北	緩やかに持ち直している	➡	緩やかに持ち直している
北陸	能登半島地震の影響により個人消費や生産の一部に下押しがみられており復旧の途上にあるものの、復旧復興需要や生産正常化が進むもとの、持ち直しの動きがみられている	➡	能登半島地震の影響により一部に下押しがみられており復旧の途上にあるものの、復旧復興需要や生産正常化が進むもとの、回復に向けた動きがみられている
関東甲信越	一部に弱めの動きもみられるが、緩やかに回復している	➡	一部に弱めの動きもみられるが、緩やかに回復している
東海	一部に弱めの動きもみられるが、緩やかに回復している	➡	一部に弱めの動きもみられるが、緩やかに回復している
近畿	一部に弱めの動きがみられるものの、基調としては緩やかに持ち直している	➡	一部に弱めの動きがみられるものの、緩やかに回復している
中国	緩やかな回復基調にある	➡	緩やかな回復基調にある
四国	持ち直している	➡	持ち直しのペースが鈍化している
九州・沖縄	一部に弱めの動きがみられるが、緩やかに回復している	➡	一部に弱めの動きがみられるが、緩やかに回復している

（注）前回との比較の「➡」、「➡」は、前回判断に比較して景気の改善度合いまたは悪化度合いが変化したことを示す（例えば、改善度合いの強まりまたは悪化度合いの弱まりは、「➡」）。なお、前回に比較し景気の改善・悪化度合いが変化しなかった場合は、「➡」となる。



新しい日本銀行券の発行を開始しました

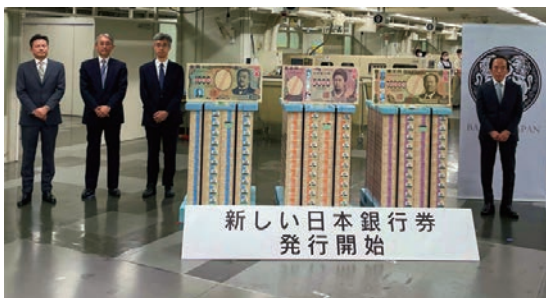
▼日本銀行は二〇二四年七月三日、新しい日本銀行券の発行を開始しました。

▼同日の午前八時前、日本銀行本店で植田和男総裁が挨拶を行い、その後、総裁、氷見野良三副総裁および高口博英理事の立ち会いのもと、金沢敏郎発券局長が職員に新しい日本銀行券の発行開始を指示し、金融機関への引渡しが始まりました。これらの模様は報道関係者にも公開しました。

▼本店のほか、全国の支店でも金融機関への引渡しを行い、七月三日だけで一兆六〇〇〇億円（二・八億枚）の新しい日本銀行券を世の中に送り出しました。

▼新しい日本銀行券に関する情報は、日本銀行ホームページをご覧ください。

▼なお、これまでの銀行券も引き続きお使いいただけます。



発行開始時の記念撮影（右から植田和男総裁、氷見野良三副総裁、高口博英理事、金沢敏郎発券局長）



挨拶を行う植田和男総裁



金融機関への引渡しの様子



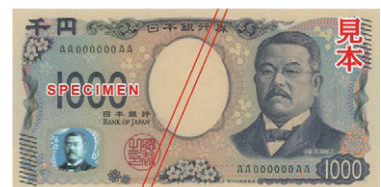
新しい日本銀行券の発行開始を指示する金沢敏郎発券局長

【一万円券】

【五千円券】

【千円券】

(表)



(裏)



中央銀行デジタル通貨に関する連絡協議会

(第七回)の開催について

▼日本銀行は、五月二十九日に「中央銀行デジタル通貨に関する連絡協議会」を開催しました。同協議会は、中央銀行デジタル通貨に関する日本銀行の取り組みについて、民間事業者や政府との情報共有を図るとともに、今後の進め方を協議するものです。

▼七回目となる今回の協議会では、「パイロット実験」の中で構築を進めている実験用システムの構成や基本機能、机上検討における機能面・非機能面の検討テーマ、「CBDCフォーラム」での各ワーキンググループにおける議論の内容、CBDCを巡る海外各国の動向等についての説明を行い、参加者の方々と意見交換を行いました。

▼連絡協議会の説明資料や議事要旨は、日本銀行ホームページ



ホームページをご覧ください。

生活意識に関するアンケート調査を実施しています

▼日本銀行では、政策・業務運営の参考とするため、本支店や事務所を通じた広報活動の中で、国民各層の意見や要望を幅広く伺うよう努めており、その一環として一九九三年以降、全国の満二〇歳以上の個人四〇〇〇人を対象に「生活意識に関するアンケート調査」を実施しています。

▼この調査は、「全国企業短期経済観測調査（短観）」のような統計調査とは異なり、生活者の意識や行動を大まかに把握する一種の世論調査です。

▼アンケートのタイトルに「生活意識」とあるように、回答者の生活に対する実感を尋ねる質問が中心となっています。例えば、「現在の景気をどう感じるか」「一年前と比べて暮らし向きがどう変わったと思うか」「一

年後の物価はこうなると思うか」といったようなことです。

これに加えて、日本銀行のことをどの程度知っているか、また、どう思っているかなど、日本銀行の業務に関連するトピックについても質問しています。

▼調査は日本銀行から委託を受けた調査機関が実施します。回答内容はすべて統計的に処理しており、回答者の名前や回答内容が特定されること、また、回答者の個人情報報が他の目的に使われることはありません。

▼一度に多くの方から、生活に関する意識やご意見を伺うことができるため、日本銀行の広報および広聴活動にとっても、非常に貴重な機会となっています。

▼調査は年四回（三、六、九、十二月）実施しており、結果は日本銀行ホームページをご覧ください。



金融研究所からデジタルアーカイブ掲載資料のご紹介 「歴史の世界へようこそ」

▼金融研究所アーカイブは、日本銀行に関連する歴史的資料を保存しています。現在、約一十万点の資料が誰でも利用（閲覧・写しの交付）できるほか、利用頻度が高い資料については、当アーカイブホームページ「デジタルアーカイブ」にて資料の画像をご覧いただけます。

▼「文書」「写真」「図面」「統計」「トピック」「いろいろ」といった六つのコーナーを設け、資料の画像を掲載していますが、この中からおすすめの資料を三点ご紹介します。

▼まずは、①「営業免状」です。明治十五年（一八八二）六月に日本銀行条例が公布され、同年十月十日に日本銀行は開業しました。営業免状には、開業前日の日付（十月九日）で、当時の大蔵卿・松方正義の署名と印影が見られます。縦約三八センチ



営業免状



金禄公債証書

メートル、横約四四センチメートルで、賞状程度の大きさです。今年は松方の没後一〇〇年に当たり、出身地である鹿児島県の博物館で開催される企画展に原本を貸し出す予定です。

▼次にご紹介するのは、最も利用回数が多い、②「金禄公債証書」です。明治政府は華族・士族などには家禄を、維新の功労者には賞典禄を支給していましたが、明治九年（一八七六）に数年から十数年分の家禄・賞典禄の価額分の公債証書を交付し、家禄・賞典禄の支給を廃止

しました（秩禄処分）。この「金禄公債証書」は、その際に交付されたものです。秩禄処分は重要な政策だったため、歴史の教科書では必ず取り上げられる出来事です。そのため、「金禄公債証書」の画像は、教科書や歴史の資料集などを編集している出版社・学習塾・予備校から利用されることが多いです。

▼最後に、テレビ番組など、マスコミから多く利用希望が寄せられる、③「日本銀行旧本店の写真」をご紹介します。

旧本店は明治十五年（一八八



旧永代橋たもとにあった日本銀行旧本店（旧北海道開拓使物産売捌所）

二）に日本銀行が開業した時の建物で、隅田川下流の旧永代橋（現在の日本橋箱崎町）のたもとにありました。大蔵省が所有していた旧北海道開拓使物産売捌所を借用したもので、明治二十九年（一八九六）に日本銀行本店が現在の場所に移転するまで、この建物で営業していました。

育成するなど、日本の近代建築発展の基礎を築いたイギリス人建築家ジョサイア・コンドルです。写真には人物や人力車も写っており、当時の街の様子がうかがえます。

▼アーカイブが所蔵する歴史的資料の一部をご紹介しますが、ホームページにはまだまだ多くの資料を掲載していますのでご覧ください。



情報サービス局にパブリック コミュニケーション課を新設

▼七月に情報サービス局の組織を再編し、一般広報の運営等を担うパブリックコミュニケーション課を新設しました。

▼イベントや本店見学、広報誌等を所掌する広報・見学グループと照会や情報公開等を所掌する広聴グループの仕事を紹介します。

1. 広報・見学グループ — イベントや本店見学、 広報誌等を所掌

① 「日銀夏休み親子見学会」 の開催

▼「日銀って何をしているところ?」「日銀ってどんなところ?」そのようなお子さまの好奇心に応えるため、お子さまに楽しく学んでいただくイベント「親子見学会」を開催しています。

▼本店では、八月二十日



1 億円の重さ体験



地下金庫の見学



お札の数を学ぶ

二十三日に、小学四年生～中学生およびその保護者の方を対象とした「日銀夏休み親子見学会二〇二四」を開催しました。

▼見学会では、本館見学やお札に関する体験学習などのプログラムにご参加いただきました。参加者からは「新しいお札の偽造防止技術を学ぶことができ、興味深く、面白かった」などの感想が寄せられました。

▼次の開催は、春休み期間中を予定しています。

▼過去の親子見学会の様様を収録した動画は、日本銀行ホームページをご覧ください。



② 「第二十回日銀グランプリ」 ～キャンパスからの提言～ の開催

▼日本銀行では、学生の皆さんが金融・経済に関心を持ち、わが国の金融・経済の現状と将来について、自分たちの問題として考えてもらうきっかけになればとの思いから、二〇〇五年度より小論文・プレゼンテーションのコンテスト「日銀グランプリ」を開催

学生のための小論文・プレゼンテーションコンテスト

第20回 日銀グランプリ

～キャンパスからの提言～

課題 わが国の金融・経済への提言

日銀グランプリは、日本銀行が毎年開催している、学生の皆さんを対象とした金融・経済分野の小論文・プレゼンテーションのコンテストです。多くの皆さんのご応募をお待ちしています！

応募資格 現在、大学（国・公立）に在籍の方（大学院生は除く。2～4名1組のグループで応募ください）

募集内容 募集内容/1チーム（国費 図書カード 15万円）
募集内容/2チーム（国費 図書カード 3万円）
募集内容/3チーム（国費 図書カード 3万円）
募集内容/4チーム（国費 図書カード 3万円）

※応募の締切は募集要項に記載のとおりです。

締切 9月30日必着

主催 日本銀行



日本銀行本店本館



本館中庭



馬の水飲み場

リ」を開催しています。

▼第二〇回目の開催となる今年度のテーマは「わが国の金融・経済への提言」です。

▼書類審査による予選（応募締切…九月三十日）により決勝進出チームを選出のうえ、日本銀行本店での決勝（十一月下旬開催予定）において、プレゼンテーションおよび審査員との質疑応答を行い、各賞を決定します。

▼今年度の実施情報や、前回決

勝参加チームの作品全文と審査員講評、決勝大会の様子を収録した動画は、

日本銀行ホームページをご覧ください。



③ 一般見学の開催

— 新たな発見を見学ツアーで —

▼日本銀行を少しでも身近に感じていただけるよう、見学案内

を実施しています。

▼見学では、国の重要文化財に指定されている本館（地下金庫、旧営業場、展示室〈建物や歴史、日本銀行の機能や役割の解説〉等）を、ガイドによる解説付きでご案内します。今回は、その見学コースをご紹介します。

▼「日本銀行本店本館」は、明治二十三年（一八九〇）の着工から、五年半の歳月を経て明治二十九年（一八九六）に竣工した、

日本人建築家（辰野金吾）による最初の国家的近代建築です。

▼本店見学は、まず、本館の中庭からスタートします。

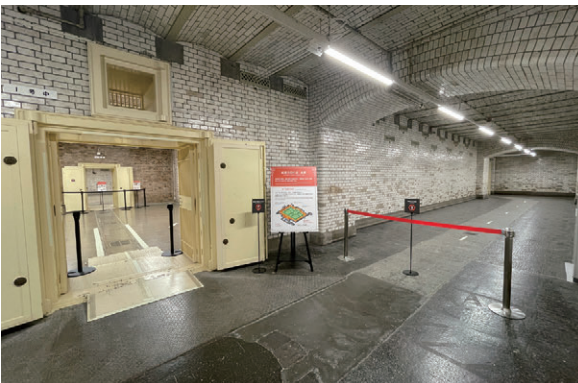
一階中庭を巡る回廊の柱および二～三階を貫く柱は、いずれも岡山県産の北木石^{きたぎ}で、つなぎ目のない一本石です。左右対称に配置された柱や、歴史を感じる外壁を間近で見ることができ

ます。

また、中庭には「馬の水飲み場」



地下金庫の扉



回廊と金庫扉



1000 億円分の模擬券



1 億円の重さ体験

もあり、明治時代の馬車文化の名残を感じることができます。

▼建物の中に入館した後は、日本銀行の機能や役割を紹介したビデオをご覧ください。

次に、当時、役員フロアとして使用されていた二階に移動し、歴代総裁の肖像画や肖像写真のほか、展示室では日本銀行の歴史や建物についての資料をご覧ください。

特に、本館を象徴するドーム

屋根の真下の部屋（八角室）は、吹き抜けの空間で、調度品などの展示も含め、日本銀行の歴史を感じることができます。

▼次に、地下一階に移動します。最初に本館の地下構造をご覧ください、いよいよ地下金庫に入っていきます。

まず眼前に現れるアメリカ製の扉は、本館の増築時に取り付

けられたもので、扉と枠部分を合わせて二五トンの重さがあります。

さらに奥に進むと、左右に大きな回廊が見えてきます。白色のレンガに囲まれたこの回廊では、かつて現金等の運搬に使用されていたトロツコレールの跡をご覧ください。

その先に、創建当初の姿をほぼそのまま残しているエリア

で、入り口のイギリス製の金庫扉が歴史の重さを感じさせます。

▼金庫内では、現金の保管状況を再現した展示を見ることができます。

パレットに積み上げた二〇〇〇億円分の模擬券を設置しており、こちらは大人気の撮影スポットとなっています。

また、明治時代のレンガな

どをバックに、「一億円（模擬券）」や「金塊（レプリカ）」「顔出しパネル」を持ちながらの撮影を楽しんでいただけます。

そのほか、カメラのフラッシュモードで撮影すると背景が大きく変わるフラッシュパネル、お札のスタンプなどをご用意しています。見学の記念に、ぜひお楽しみください。

▼最後は、明治から昭和の半ば頃まで実際に窓口業務を行っていた、一階の旧営業場です。

二階まで吹き抜けた広々とした空間や、壁等に施されたさまざまな装飾は、見る者を圧倒する迫力で、明治期の姿を今でも残しています。

▼本店見学は、要予約制で、九〇日前から予約を受け付けています（料金は無料）。インターネットの予約サイトから二四時間、いつでも予約を取ることができます、小学五年生から、どなたでも見学が可能です。



1 階旧営業場



顔出しパネル



フラッシュパネル



何が写るかは撮影してからのお楽しみ



1 階旧営業場の装飾

編集後記

■ 秋号を発刊し、ようやく秋を迎える準備ができた気がします。今年の夏は酷暑でしたが、読者の皆さまは体調を崩されていないでしょうか。

■ 「対談」では、治療に東洋医学を取り入れている医学博士・津田篤太郎先生に、易経に関する著作もある氷見野副総裁がお話を伺い、西洋医学と東洋医学のアプローチの違いやその相互補完性について分かりやすくお話しいただきました。その世界観の違いは、全く違う分野である金融規制・監督や経済政策を考える際にも当てはめ得るというのは、とても興味深い視点だと思います。

■ 「インタビュー」には、パティシエという言葉に世に広めた辻口博啓さんにご登場いただきました。多くの苦難に直面しながらも、小学生からの思いを貫き、人より努力することはもちろん、目標から逆算する形で戦略的に物事に取り組むことによって、現在の地位を築かれました。そこで満足せず、常に進化し続ける姿勢が、辻口さんを辻口さんたらしめているのだと感じます。また、今年の1月に震災に見舞われた故郷能登の復興にかける思いも伺っています。食や伝統文化、アートなど豊富な資源を持つ能登が早く復興し、「地域の底力」で取り上げる日が来ることを心待ちにしています。(小牧)

[アンケート募集中]

「にちぎん」に関するご意見・ご感想は、アンケートよりお寄せください。日本銀行のホームページからインターネットでもアンケートにご回答いただけます。



※本誌は、全国の日本銀行本支店および貨幣博物館、旧小樽支店金融資料館等でお配りしています。個人の方の定期購読、郵送はお取り扱いしておりませんのでご了承ください。なお、既刊号全文をPDFファイル形式で日本銀行ホームページ上に掲載していますのでご利用ください。(https://www.boj.or.jp/about/koho_nichigin/index.htm)

※本誌に掲載している内容は、必ずしも日本銀行の見解を反映しているものではありません。日本銀行の政策・業務運営に関する公式見解等については、日本銀行ホームページ(https://www.boj.or.jp)をご覧ください。

にちぎん 2024 年秋号
編集・発行人 小牧義弘
発行 日本銀行情報サービス局
〒103-8660
東京都中央区日本橋本石町 2-1-1
☎ 03-3277-1947



デザイン 株式会社市川事務所
印刷 株式会社アイネット
禁無断転載

新たな発見を見学ツアーで。皆さまをお待ちしています。

2. 広聴グループ

照会や情報公開等を所掌

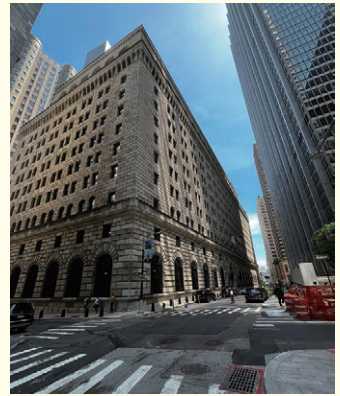
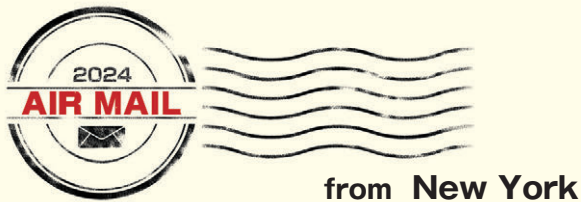
▼広聴グループでは、電話やメール等により一般の方々などから寄せられる、日本銀行に対する意見・要望や各種照会の窓

口機能を担っています。

▼窓口寄せられた意見・要望は、行内で組織的に共有を図るほか、照会に対しては、各所属の広報担当者と連携しつつ、回答を行っています。

▼このほか、情報公開・個人情報保護窓口としての役割も担っています。





頑丈な地盤の上に築かれているニューヨーク連銀ビル

ニューヨークの地盤と中央銀行

2024年4月、ニューヨーク市でマグニチュード4.8の地震が発生したことは当地の人々の記憶に新しいところです。外を歩いていれば気付かない人もいる程度の揺れではありましたが、この規模の地震は同地域では過去にほとんど例をみない珍しい出来事であったため、発生当初、少し騒然としていました。

ニューヨーク連邦準備銀行（以下、ニューヨーク連銀）に出向者として勤務している私は、当時、地

震多発国から来た者の務めと思い、余震に備えて同僚たちに身を守るための心構えを伝え、感心されたことをよく覚えています。

さて、地震と直接関連はありませんが、地盤ということでは、ニューヨーク市の地盤は、「ベッドロック（bedrock）」と呼ばれる強固な岩盤が広域にわたって存在している点で特徴的だそうです。建物の基礎を支えるこの岩盤の存在によって、当地では

100年以上前から高層ビルを建てるのが可能だったとも言われています。

実は、このベッドロックはニューヨーク連銀とも関わりがあります。ニューヨーク連銀は、連邦準備制度の代理として、他国の中央銀行や国際機関などが保有する金塊を保管する業務を行っており、銀行内の金庫には約50万本の延べ棒、重量にして約6000トンという極めて高重量の金が保管されています（2024年時点）。金庫がこの重量を支えることができて、地下に厚いベッドロックの地盤があるからだそうです。

金融政策の運営をはじめ、多岐にわたる業務を行っている連邦準備制度ですが、その役割の発揮に欠かせない業務の安定性は、物理的な面からも確保されているようです。

（ニューヨーク連邦準備銀行）



セントラルパークでもベッドロックを観察できる

*本コーナーは海外で働く日本銀行職員または日本銀行からの出向者が執筆しています。



にちぎん